

司式：佃 雅之  
奏楽：中井喜久子

前奏：「これぞ聖なる十戒」(J.S. パッハ)

招詞：14 娘シオンよ、声をあげて喜べ。わたしは来て、あなたのただ中に住まう、と主は言われる。17 すべて肉なる者よ、主の御前に黙せ。主はその聖なる住まいから立ち上がられる。(ゼカ2:14、17)

讚美歌：20「主に向かってよこび歌おう」

交読 詩42:1-7a

- 01 【指揮者によって。マスキール。コラの子の詩。】  
02 涸れた谷に鹿が水を求めるように/神よ、わたしの魂はあなたを求める。  
03 神に、命の神に、わたしの魂は渴く。いつ御前に出て/神の御顔を仰ぐことができるのか。  
04 昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。人は絶え間なく言う/「お前の神はどこにいる」と。  
05 わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす/喜び歌い感謝をささげる声の中を/祭りに集う人の群れと共に進み/神の家に入り、ひれ伏したことを。  
06 なぜうなだれるのか、わたしの魂よ/なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう/「御顔こそ、わたしの救い」と。  
07a わたしの神よ。

朗読聖書①詩編22:2-3

- 01 【指揮者によって。「暁の雌鹿」に合わせて。賛歌。ダビデの詩。】  
02 わたしの神よ、わたしの神よ/なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず/呻きも言葉も聞いてくださらないのか。  
03 わたしの神よ/昼は、呼び求めても答えてくださらない。夜も、黙ることをお許しにならない。

朗読聖書②マタイによる福音書15:21-31

◆カナン女の信仰

- 21 イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。  
22 すると、この地に生まれたカナン女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。  
23 しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」  
24 イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところろにしか遣わされていない」とお答えになった。  
25 しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。  
26 イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやっはいけない」とお答えになると、  
27 女は言った。「主よ、ごもつとです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」  
28 そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。

◆大勢の病人をいやす

- 29 イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行かれた。そして、山に登って座っておられた。  
30 大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人、体の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をいやされた。  
31 群衆は、口の利けない人が話すようになり、体の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩

き、目の見えない人が見えるようになったのを見て驚き、イスラエルの神を賛美した。

祈祷

天地の創造主にして全能なる活ける真の神、あなたの聖名を褒め称えます。私たちが御言葉によって呼び集め、礼拝へと招いてくださった恵みを感謝致します。

自由と正義の神、私たちは今日、『信教の自由』を覚えて祈ります。この礼拝にあつて、私たちがあなたを信じる信仰を言い表し、またあなたの与えてくださる『信教の自由』の大切さを思い起こすことができるようにしてください。そしてまたこの『自由』を奪おうとする諸々の力に対して、いつも目覚めていることができますように。

主なる神さま、今日この『信教の自由』を覚えるにあつて、私たちのこの国が、過去に敗戦をもってその戦いの終わりを告げるまでの間、アジアの国々を侵略し、多くの人々を傷つけ死に至らしめるに至ったこと、また多くの日本人をも傷つけ死に至らしめたことを思い起こします。またその時代にあつて、あなたの名によって立てられた教会も大きな罪を犯したことをあなたの御前に告白致します。

主なる神さま、私たちに正しく物事を見抜くことのできる澄んだ眼差しと確かな信仰をお与えください。どうか私たちが自分だけの狭い考えや立場に囚われることなく、自分のことだけを思って他者に向き合うことが無いよう心を整へ導いてください。互いの違いに目を閉ざすのではなく、一人ひとりの尊厳と良心を尊び合うことができるものとしてください。私たちキリスト者の信仰を守ろうとする願いが、全ての人々の信仰や良心を守る思いと響き合うものでありますように。私たちをあなたの平和を生み出す者として用いてください。争いの在る所に和解を、分断の在る所に理解を、憎しみの在る所に赦しをもたらす者としてください。

主よ、この教会の新しい年の歩みを祝しお守りください。この教会で行われる全てのことが御旨に適うものとなりますように必要な働きを教えてください。そして私たちのその働きによってあなたの聖名が崇められ、益々福音の光を照り輝かすことができるようにしてください。

憐れみ深き主よ、悩みの中にある者一人ひとりをどうか顧みてください。病床に伏している者が居ります。またその看病と介護に心と力を注ぎ礼拝に集うことの出来ない者も居ります。更に様々な事情の中で教会から遠ざかっている者も居ります。しかし主よ、そのいずれの者も、あなたが造られ、あなたの御手の内に置かれているかけがえのない存在であることを私たちは信じます。どうか主よ、病の中にある者には癒しを、疲れと重荷を負う者には慰めを、孤独と不安の中にある者には希望と励ましをお与えください。

主なる神、この礼拝において御言葉に仕える説教者を与えてくださった恵みを心より感謝致します。笠原義久牧師が聖霊の豊かに導きを受けて、あなたの御言葉を力強く、そして慰めと希望をもって説き明かしてくださいように。人の言葉を超えてあなたご自身の御声が、この教会に響き渡りますように。聴く私たち一人ひとりをも聖霊によって導いてください。心と思いを開かれ、御言葉を自分自身への語りかけとして受け取り、信仰と従順をもって応答することができますように。どうか今、この所に共に臨み、語る者にも聞く者にもあなたの恵みを豊かに与えてください。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

お読み頂いた『マタイ福音書』15:21-31、今朝はこの物語の展開を少し丁寧に  
見ていくことから始めたいと思います。冒頭の21節「イエスはそこをたち、テ  
イルとシドンの地方に行かれた」とあります。「テイルとシドン」、この二つは地中海に面  
したフェニキアの町です。イエスは何故そこを選ばれたのか。「そこをたち」と  
いうのは、これまでの舞台であったガリラヤを“退去する、引き下がる”つまり、  
“退く”というニュアンスの強い言葉(ἀναχωρέω アナコレオ)が用いられて  
います。ですから主イエスはガリラヤでの精力的な宣教活動、またしばし  
ば繰り返されたファリサイ派や律法学者たちとの対決的な論争に些か疲れ  
て、静かな環境を求め、内的な安らぎと霊的な充電をしようとした、そ  
のように言うことが出来るかも知れません。

ところがそこで予期せぬ出来事が起こったのです。それにしてもこの一  
人のカナンの女性は何故、「主よ、ダビデの子よ、わたし(たち)を憐れんでください  
(Ἐλέησόν με, κύριε υἱὸς Δαυὶδ ἡμεῖς, κτλ.ヒエ・ダビド)」、そのよ  
うに叫んでイエスに接近して来たのでしょうか。「娘が悪霊にひどく苦しめら  
れているから」、確かにそうです。しかし何故、「主よ、ダビデの子」なのでしょう。

彼女はこの地に生まれたカナンの女性でした。ユダヤ人ではありません。  
その彼女が、「主よ、ダビデの子よ」、そのように言うためには、ユダヤ人の間  
で、「主」、「ダビデの子」、そういう称号がどれほどの重みを持つ言葉であるか、  
そのことを十分に聞き知っているということ、そのことが必須のことであ  
ります。しかしそう呼ばれていることを知っているということと彼女自身が  
実際にそう呼ぶこととの間には一つの飛躍がなくてはなりません。22節  
にこの女性が「出て来た」とありますが、それはこの女性が自分の住む地理的  
な世界から出て来ただけでなく、文化的、精神的、宗教的世界から出て来  
た、自分の住む文化的、精神的、宗教的世界から出て来た、そういうこと  
を含んでいると思います。そのことの意味は大きいし、また、また代償も小  
さくはなかったでしょう。そして彼女にとって異邦人であり、自分の同胞  
フェニキア人がそのような信仰的な称号で呼ぶことは決してないという  
存在に向かって、生まれて此の方、彼女の辞書には一度もなかった言葉で  
イエスに呼び掛けをしたのです。

「主よ、ダビデの子 κύριε υἱὸς Δαυὶδ ἡμεῖς κτλ.ヒエ ダビド」

彼女が魂の底から承認し、傍目もかまわず全存在を賭けて、それこそ存  
在そのものが祈りとなって発した言葉、それが「主よ、ダビデの子よ」とい  
う叫びであったと言えるように思います。

「主よ、ダビデの子よ、わたし(たち一複数)を憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦し  
められています。」

しかし答えはありませんでした。「イエスは何もお答えにならなかった」とあり  
ますけれども、直訳すれば「一言もなかった」(οὐκ ἀπεκρίθη Ουク・アペクリテ[答  
えがない])であります。そのようなことが予想することができたでしょうか。  
「求めよ、さらば与えられん(マ7:7)」と、そのようにイエスは約束していました。  
しかし一言も無い、沈黙、ただの沈黙、ピンと張りつめた空気の中、一人の  
異邦の女性の必死の声、痛ましいまでの叫びだけが聞こえてきます。

弟子たちは叫びながら付いて来るこの女性が疎ましかったのでしょうか。  
「追い払ってください」と言い出す始末であります。その時やっと、しかしはっ  
きりと発せられたイエスの言葉、

「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしき遣わされていない。」

これは“沈黙”以上に厳しい“拒絶”としか聞こえない、このイエスの言葉  
の趣旨は、これに先立つマタイ福音書 10:5-6 に記されている 12 弟子の派  
遣の言葉と一貫性をもっています。即ち、

異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。むしろ、  
イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。

この言葉には、イエスがこのことを神の意志と受け止めていたと思われ  
る、そういう下向な使命感、頑なまでに一途な使命感というものがこの言  
葉には伺えます。

さて、ここで注目すべきは、このマタイ 15 章、今日の個所ですけれども、  
ここと並行している『マルコ福音書』7章の記事、大体同じ事が語られていま  
すけれども、そこにある、マルコ福音書にある微妙であるけれども、しか  
し重要な一語が、このマタイ福音書には無いということ、落ちていたとい  
うことです。それは「まず子供たちに十分食べさせなければならない(7:27)」というマ  
ルコ福音書の言葉です。「まず子供たちに、この「まず〜に」(πρῶτος プロトス)、  
というこの一語の有るか無いかで、これが優先順位の問題なのか、それと  
も“イスラエルだけが”という排他的な選別の問題なのか、そういう問いを引き  
起こすこととなります。マルコ福音書の言葉によれば、“まずはユダヤ人”で  
あったとしても、“その後には異邦人にも”、そういう可能性に道を開くこと  
になります。

けれどもたとえこのような時間的な順序が、“まずユダヤ人に、そしてその後  
に異邦人にも”というそのような時間的な順序があるにせよ、このカナンの女  
性にとっては“今”が問題なのです。娘がひどく苦しめられているのは今こ  
の時であって、悠長に何時までも待ってはられない、このような場面で  
の主イエスの“沈黙”と、それに続く“拒絶”、全てのことを同時に出来ない  
ならば、順序があるということは受け入れざるを得ないでしょう。神の救  
いの歴史におけるイスラエルの選別には、選別の外にある者は勿論、また  
先に選ばれた者も口出しは出来ません。選ばれるのは神だからです。その  
ことを重々承知の上で、なぜあのような“沈黙”があるのでしょうか。また  
あのような“拒絶”としてしか受け取れないような言葉が発せられなければ  
ならなかったのか。この主イエスの或る意味での“沈黙”、これは言葉を換  
えて言えば“神の沈黙”、そのように言ったらいいでしょうか。私たちは、こ  
のような“神の沈黙”としか受け取ることの出来ないという出来事、そうい  
う事実というものをどのように受け留めたらよいのでしょうか。

“神の沈黙”と言うと、旧約聖書の至る所にそのような記事が記されていま  
す。例えば旧約聖書『出エジプト記』、その中にこのような言葉があります。

<sup>23</sup>それから長い年月がたち、エジプト王は死んだ。その間イスラエルの人々は労働のゆえ  
にうめき、叫んだ。労働のゆえに助けを求めた彼らの叫び声は神に届いた。<sup>24</sup>神はその嘆  
きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。<sup>25</sup>神はイスラエル  
の人々を顧み、御心に留められた。(2:23-25)

「長い年月がたち」とありますが、一体どのくらいの長さだったか、それまで  
にどれほど多くの人が苦しまなければならなかったのか、いずれにせよ、  
神は長く沈黙を守っておられたのです。旧約の詩編詩人は謳います。

<sup>2</sup>潤れた谷に鹿が水を求めるように、神よ、わたしの魂はあなたを求める。

<sup>3</sup>神に、命の神に、わたしの魂は渴く。 と、それはなぜか。

いつ御前に出て、神の御顔を仰ぐことができるのか。(42:2,3)

<sup>4</sup>人は絶え間なく言う。「お前の神はどこにいる」と。(42:4b)

神よ、あなたの裁きを望みます。わたしに代わって争ってください。  
あなたの慈しみを知らぬ民、歎く(嘆く)者 よこしまな者から救ってください。(43:1)  
神よ、わたしを憐れんでください。わたしは人に踏みにじられています。(56:2a)

このように旧約の詩人たちが涙と共に訴えるのは、この世界の悪と罪です。抑圧と不正、嘲り、そして戦争はその最たるものです。個人の力ではどうにもならない惨状に喘ぎ、呻吟する神の民の悲痛な叫び、「神よ、このような事態にあなたが御力をもって介入してください」と。詩編詩人の訴えは次のような訴えでその極みに達します。

神よ、沈黙(יָחַד דָּמִי)しないでください。黙していないでください。静まってい  
ないでください。(83:2) 更にこうあります。一本日の朗読聖書①詩 22:2-3—  
わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離  
れ、救おうとせず、呻きも言葉も聞いてくださらないのか。(22:2)  
わたしの神よ、昼は、呼び求めても答えてくださらない。夜も、黙ることをお許しにな  
らない。(22:3)

この悲痛な叫びは詩編詩人のものだけでなく、あのゴルゴダの丘で十字架の上から、魂の奥底から絞り出された叫びです。15年前の『3.11』、あの大地震と大津波、自然の脅威の前には、個人どころか、寄って集っても人間の力では如何ともし難い、その自然の猛威の前、人間が何もすることができない。だからひたすら祈る、助けを神に求める、深い淵の底から助けを求める、しかしそれでも神の応えは聞こえてこない。

私たちは“神の沈黙”ということについて、合理的で理路整然とした説明をくどくど述べようとする、そのような試みを放棄することから始めなければならぬと思います。“神の沈黙”ということに関して次のようなことがよく言われてきました。即ち、

“神の沈黙、あるいは拒否というものは、一時的、あるいは短期的な試練であって、それを乗り越えた際には、より純粋な、より高次の神理解に 一神がどういう方であるかということ一、そのことを理解する、その事に到達できる。そのための教育的な隠れた意図が神にはおありになるのだ。私たちはそのような神の隠れた本当の御心というものを読み取らなければならないのだ。神の沈黙というものはそういうものなのだ。”と。

これはまたマタイ福音書の今朝の聖書の出来事についての解釈としてよく語られてきたことです。“イエスの沈黙というものは、そのような女性に対する教育的な配慮から為されたものなのだ”と、そういう意図が明らかにあるという、そういう解釈、しかし確かに実際、“神の沈黙”とか“拒否”というものをそのように受け取るべき場面というものが私たちの経験に照らして全く無いとは言えないでしょう。

翻って、この先の世紀、20世紀に人類が初めて経験した二つの世界大戦は、同時に、ヒロシマ、ナガサキ、そしてアウシュビッツの経験でもあります。或る人は言います。“今世紀の人間はかつての人間のように、どうして神はこれほど多くの悪を許しておくのか”とは、最早問わなくなっている。それどころかもっと徹底的に、“これほど多くの悪を許す神なるものは存在し得るのか”と、そのように問う。“子供たちが飢えざるを得ないのを止められない神が存在するのか。アウシュビッツやヒロシマ以後もなお、全能であると申し立てる神を信じることができるのか”と。

私たちはそのような問い自体をどう考えればよいのか。私たちはそのような問い自体を拒むべきではないのか。神の義しさを問い、悪の問題を問う。しかし神の義しさを問う問い、悪の問題を問う問い、そういう問いに対しては、“ただ一つの解決だけが存在する”と、そのように言うことがで

きるでしょう。それは、“その解決は存在しない。”という解決です。

この一人のフェニキアの女性が経験したことは、今お話ししたことと同じ質の問題であったとそう思います。そして彼女と同じように、愛する者の身に起こる場合であれ、自分自身に起こる場合であれ、私たちもこのような状況に遭遇することが確かにあります。そのような時、神の救いの歴史のこと、神の救いの歴史のことを語り聞かされても、あるいはまた救いの歴史における神の正しさを振り翳されても、苦しみの最中にある魂には何の支えにも、また癒しにも救いにもならないのではないのでしょうか。

それでは今朝のこの個所における主イエスの沈黙とは何であるのか。一人のドイツの神学者は“神の最大の沈黙は、十字架である”と、そのように言って、この様に言葉を継いでいます。

“神が一言も答え給わず、口を閉じていたもうこの時こそ、世界の大きいなる展開の時である。その時に神殿の幕は引き裂かれ、神の胸はその全ての傷と共に私たちに對して開かれる。沈黙される時に、神は私たちの道づれとして、死と深淵を超えて進まれる。このゴルゴダの沈黙の夜によってこそ、私たち全てが生かされている。もし十字架が無かったならば、私たちはどうなっただろうか。もし神がその独り子を私たちのために沈黙と暗黒の谷間に送り給うたことを、また彼が死を超えて導き手となることを知らなかったとすれば、私たちはどうなったであろうか。”

私はこのように思います。神は私たちが苦しみを一人で担う必要が無いよう私たちと共に苦しみを担っていかれる。神は私たちの暗黒の谷間に自ら下ってくださった。そして共に歩むことによって苦しみを克服して下さる。神ご自身が十字架の上で神の正しさを問うそういう問いに答えを与えられ、そして神の義しさを問うその問いに私たちが答えるあらゆる言葉を遮られる。十字架に付けられた神の前では神の義しさを問うそういう問いは正に沈黙する、とそうように私は思います。

このフェニキアの女性は“イエスの沈黙”に怯みませんでした。それはイエスが“沈黙”しようとも、それは無関心さの徴でも、また冷淡さの表れでも無く、この“主よ、ダビデの子よ”と呼びかける相手は“必ずや救いを、癒しをもたらして下さるお方に違いない”と、そのように信じて疑わなかったからです。今すぐ見える徴は無くとも、ただ信頼していたのです。

彼女が潜らなければならなかったもう一つの試練は“沈黙”の次に来た“拒絶”でした。これに対する彼女の最初の対応は、「主よ、ごもっともです。」(Ναὶ κύριε Ναι·Κριε) [はい、然り、確かに、そうです]という言葉でした。この「ごもっともです」という言葉は端的に「そうです、主よ、そのように訳されるべきです。彼女は全面的に主イエスの言い分を認め、そして受け入れました。“自分はイスラエルの家の失われた羊でない”ということを中心承認しているのです。神の恩寵に、神の恵みに、自分が当然与ることができるなどは露だに思っていない、心の底からの謙った思い、それがここでの彼女の本当の姿です。

翻って何故主イエスはあれ程までにファリサイ派や律法学者と衝突し続けたのか。それは彼らがイスラエルの家の誇らしげな高慢な羊であって、少しも失われた羊の自覚を持っていなかった、そのことの故ではないのでしょうか。それに引き換え、ユダヤ人からは異邦人として蔑まされているこのフェニキアの女性の何と正直で、そして謙遜であることか。救いを受けるに値しない者だから、だからひたすら救いを乞い求めるしかないのだ。彼女は実際にそうしたのです。「小犬でさえも主人の食卓から落ちるパン

辱をいただくのだ」と、そのように言うことができた、「いただく」のです。権利としての要求ではなく、無に等しいという自分認識、救い主へのひたすらなる信頼、そして直向きな懇願です。

彼女に対するイエスの称賛の言葉は並はずれています。「あなたの信仰は立派だ」(Ὁ γύναϊ, μεγάλη σου ἡ πίστις Οὐγναί・メグラー・ソウ・ハー・ピステイス)、「あなたの信仰は大きい」、そして願いは直ちに叶えられたのです。

最後にもう一度先ほどのドイツの神学者の言葉に聴きましょう。この様に言っています。

沈黙される時に神は私たちの道づれとして、死と深淵を超えて進まれる。このゴルゴダの沈黙の夜によってこそ、私たち全てが生かされている。もし十字架が無かったならば私たちはどうなっただろうか。もし神がその独り子を私たちのために、沈黙と暗黒の谷間に送り給うたということを、また彼が死を通して導き手となるということを知らなかったとすれば、私たちはどうなっただろうか。

今朝、私たちもまた、この十字架の主、救い主イエスへのひたすらなる信頼を、心の底からの謙りの思いを持って言い表したい、そのように祈り願います。お祈りします。

主なる神さま、語りました言葉を聖霊の働きによって活けるあなたの御言葉としてください。あなたが全てのことについて、全ての領域で、主権者として、憐れみの主として支配しておられる御事実がいよいよ明らかとなりますように。私たちに与えられている信仰がただひたすら、私たちを共なる存在として、共に生きることを喜び給うあなたのご意思によることを信じることができますよう、主キリストの御名によって祈ります。アーメン

#### 讚美歌 531「主イエスこそわが望み」

#### 献金・感謝・主の祈り(中川信明)

イエス・キリストと私たちの父なる神さま、聖名を賛美致します。どうか御国を来たらせてください。今日もこのように雪の中ですが、一人ひとりの名前を呼んで教会へと集められ、あるいはライブ配信を通して、共に礼拝に与ることができましたことを感謝致します。

今日も笠原牧師の口を通して御言葉の説き明かしを聴くことができました。感謝致します。神さまの沈黙の意味、そして神さまが沈黙を打ち破られ、私たちを、叫びに応じて造り出してくださることを、どうかこれからも信じて共に歩んで行くことができますようにお導きをお願い致します。

私たちは日々夫々あなたから恵みを与えられておりますが、その中からほんの一部を教会とあなたのために献げます。どうか御用のためにお使ください。私たちがこの一週間をあなたによって導かれて歩んで行くことができますように「主の祈り」を、共に、ここに祈らせていただきます。…『主の祈り』アーメン。

#### 派遣：讚美歌 92「主よ、わたしたちの主よ」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の清き親しき交わりとが、永遠とこしなえにあるように。アーメン。

報告：(1)病床洗礼 受洗者「橋田和子」さん紹介、(2)被災地訪問報告

後奏：「われ汝に依り頼む、主よ」(J.S. バッハ)